

技術科教師の役割

○技術の教師一人ひとりの情熱が、生徒たちを変えることができる。(現代に必要な課題)

☆地域素材・地域教材＝生徒の学びを発展させる教材であり、多面的なものの見方と価値に気づかせることが大切と考える。教科の枠にとどまらない発展性を持った教材でもある。

⇒豊かな郷土に気づかせ、郷土の良さを活かし、郷土に誇りを持つ生徒を育てること。

・ものづくり：地域の産物、伝統技術、地域産業など。

○課題解決力だけでない問題解決力をつけるためには、生徒自らが問題に気づき、解決すべき課題を発見して、解決方法を考えることができる力、転移・応用できる力(科学的根拠に基づく理解—技術)を身につけることが大切と考える。

⇒例えば、視点を立ててイメージマップのように考えを広げたり、5W1H を当てはめて考えを整理したり、生徒の実態を踏まえて、考えさせ方の手法に工夫を加えることも必要と思われる。

○教師は、定まった教材の指導法的研究だけでなく、常に生徒たちが興味を持っておもしろく学べる教材論的研究に取り組む必要がある。まずは教師本人が面白いと思うものを探索し、教材としての価値と指導の展開を考え、方法論的に科学的根拠に基づく転移性・応用性を持たせる工夫が必要。指導計画の吟味と提示がポイントとなる。

キャリア教育に魂を入れるのは技術教育

○キャリア教育は、生涯にわたって自分がどのように生きるのかを、考えられるように支援する「生き方指導」の教育である。日本においては大正期の職業指導（キャリアガイダンス）と職業教育から始まり、進路指導、キャリア教育と、時代の流れとともに変遷してきた。そして現在、中学校教育において職業教育は存在しない。しかし、真の意味で自己理解と職業理解を果たすためには、インターンシップが含まれたとしても、キャリア教育だけでは不十分であり、社会における職業の全体像は理解できない。様々な実践活動を伴った技術教育の中で、自己の特性の理解や価値観、職業観が芽生えたと考えられる。

すなわち職業指導と職業教育は元来、車の両輪であり、キャリア教育に魂を入れることができるのは技術教育でもある。自己の特性の理解や価値観、職業観が芽生えた生徒たちは、将来社会で働く自分の役割を見出し、世の中の役に立つこと。生きることを考えられる力を、技術教育の実践活動を通して身に付けることができると考える。

⇒自分の役割をおろそかにすることは、社会に大きな影響を及ぼす。/マンションデータ偽装問題など。※『一隅(いちぐう)を照らす』⇒自分自身の置かれたその場所で、己の仕事に精一杯打ち込んで光り輝く人が真の国の宝(参考：天台宗ホームページ一隅を照らす天台宗伝教大師最澄のことば「山家学生式(サカガクシヨウキ)より)

☆人は10代さかのぼれば、 2^{10} の数の先祖(父母)が居て存在する。誰ひとり欠けても今を生きていない。20代さかのぼれば…考えれば「人間みんな一人ではない」。先人たちが文化をつなぎ、創りあげてきた。

⇒道具や技術を使うことは、社会や文化とつながることであり、人とつながることである。

じっくりと自然やモノと向き合い、対話することの意味を理解できるように、気付かせることが大切。

モノ（作物・製品）は、あって当たり前ではない

○モノや道具は、誰かが何処かで作ったから、私たちは、手にすることができる。モノや道具と対話することは、五感を働かせ、真のモノの価値を知ることである。

アクティブ・セフティーの重視（※アクティブ・ラーニング）

○対処療法でない。技術教育の実践活動を通して、教師だけでなく、生徒自身がリスクマネジメント力を身に付けることができると考えられる。

⇒私たちは失敗から学ぶことも多いが、様々な活動には危険が伴い、判断や操作を誤ると取り返しのつかない事態になる場合もある。また、道具は使い方ひとつで役に立ったり、凶器にもなり得る。行動をしっかりとイメージし、危険を察知して未然に防ぐことができる Active Safety の力は、私たちが現代社会において安全に生活する上で欠くことのできない力の一つでもある。

・学びの中でアクティブ・ラーニングが叫ばれる昨今、技術的な諸問題に洞察力を駆使して、解決をはかる技術的問題解決活動は、何のために行動するのか意義を認識して、主体的に目的を定めて計画的に実践する PDCA に他ならない。

⇒技術的問題解決活動でキーワードとなるのは、自然的物理的制約・社会的倫理的制約・経済的・時間的制約など、様々な諸条件から最適値を見つけ出す力、すなわち「最適値の発見力」である。

（※一般例：work-life balance）

技術科の原点を忘れない

○教科名が変わらない限り、教科の目的は変わらない。生活を明るく豊かにして、夢を叶えるのが技術である。

⇒技術科教育での学びは、「技術のシステムに関する学び」「技術的思考能力、問題解決実践力の修得」「技術的な実践活動や技術史の学びを通して、人間と文化、産業と社会など、技術教育の学習意義を理解する」ことであり、それらを踏まえた技術の評価・活用能力の育成でもある。

※まずは、これらの学びの価値に気づかせることが大切である。

※参考キーワード：5W1H、創造の段階、可視化、最適値、ITC、報・連・相、

○いつ(When)、どこで(Where)、だれが(Who)、なにを(What)、なぜ(Why)、どのように(How)、・・・・・・どのくらい(How many)は、例えば、アイデアを出し合い、問題解決方法を考えるとき、言葉で説明するとき、文章をまとめるときなど、あらゆる PDCA の場面で活用しよう。

○実践的な創造力を身に付けるには、模倣→改作→創作→創造・作品→製作品→製品の段階を踏むことを意識しよう。

○思考の過程を言葉や文字や図・動画等で可視化して共有化を図ろう。

○様々な諸条件から最適値・最適解を見つけ出す思考過程を言葉で説明してみよう。

○電子黒板、タブレット端末等、ICT の活用力・指導力向上を図ろう。

○報告・連絡・相談で情報の共有化を図り、表現力・対話力を高めよう。